様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１５１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７３０６９１

研究課題名（和文）「文検国語科」試験問題の研究

研究課題名（英文）A study of an examination for a teacher's license of Japanese language in secondary school before World War 2

研究代表者
小笠原　拓（OGASAWARA, Taku）

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：２０３７２６７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,000,000円、（間接経費）　600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前期において行われた「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」のうち、「国語科」教員の検定試験に着目し、その試験問題の内容について分析を行ったものである。時代を通じて試験問題の内容がどのように変化したか、またこの試験問題に受験生がどのように対応したか等について、歴史的な手法により検証を進めた。戦前の中等学校「国語科」の実態を明らかにする上でも、貴重な資料を発掘することができたと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study is one about an examination for a teacher's license of Japanese language in secondary school before World War 2. I inspect historically not only how the contents of the test had changed, but also how examinees tried it. In this research I consider that I excavated the important documents for studying about a subject of "Japanese language" itself in secondary school before World War 2.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：文検国語科　独学　教員養成　資格試験制度　学びのネットワーク

## １．研究開始当初の背景

### （1）文検制度の概要と歴史的意義

戦前の中等学校教員の養成には、大きく分けて三つの道筋が存在した。最もオーソドックスな方法は、高等師範学校を卒業することであるが、これは男女合わせても全国に四校（東京高等師範学校・広島高等師範学校・東京女子高等師範学校・奈良女子高等師範学校）しかなく、極めて狭き門であった。次に考えられるのが、所謂「無試験検定」と呼ばれるもので、文部省（現在の文部科学省）の許可を受けた学校を卒業して、免許状を受け取るというものであった。これは現在で言うなれば、教員養成を主たる目的としない大学において、必要な単位をとって免許の交付を受けるのに似ている。いずれにせよ、中等学校（中学校・師範学校・高等女学校等）の教員が、小学校と比較して遥かに社会的地位が高かったこともあり、高い学歴が前提となっていた。

しかし高い学歴がなくとも、中等教員になる方法が一つだけ残されていた。それが本研究の対象である文部省師範学校中学校高等女学校検定試験である。この制度では、文部省によって課される試験を通過することによって、指定された学校に通うことなく、免許状を得ることができた。「国語科」（あるいは「国語漢文科」）の場合、毎年、多いときには千人以上の受験者がこの試験に挑み、教員免許状の獲得を目指したのである。

興味深いことに、この制度における検定試験の際の試験問題は、（公的な形ではないものの）様々な形で残されている。もしこの試験問題を時代別に並べることができれば、それだけで戦前期における中学校・師範学校・高等女学校における教員に求められた資質の内容を、より具体的な形で把握することができるはずである。また所謂「独学の徒」たちが、これらの問題をどのように捉え、合格のためにいかなる学びを行ってきたかを解明することは、戦前における「教師の学び」の一様相について考察する貴重なドキュメントとなりえるのではないかと考えられる。

### （2）これまでの研究状況

しかし管見の限り、国語教育分野において「文検」を扱っている本格的な研究は存在しない。このような状況に至った一つの要因として、元来、国語教育分野の歴史研究は（筆者自身のこれまでの研究を含めて）初等教育に偏る傾向があり、中等教育に携わる教員を養成する「文検」にはあまり注意が払われてこなかったことが考えられる。

「文検」にいち早く注目した研究としては、佐藤由子『戦前の地理教師――文検地理を探る』（古今書院、1988 年）を挙げることができる。佐藤は地理学研究者および社会科教員の立場からこの制度に着目し、試験内容の分析や受験者の実態解明を詳細に行った。佐藤の研究以前、「文検」という制度は知られていたものの、その具体的な実態はほとんど明らかにされていなかった。佐藤によって、ようやくこの試験制度の本格的研究がスタートしたといえる。

佐藤の研究を受けて、この制度の本格的な研究を推し進めたのが、寺﨑昌男を中心とする「文検」研究会である。この「文検」研究会による研究成果は、まず『「文検」の研究――文部省教員検定試験と戦前教育学』（学文社、1997 年）にまとめられた。この著作によって、「文検」の法的規定・試験科目・日程など制度の面が明らかにされた。また戦前における「教育学」の実態と歴史の解明という観点から、「教育科」および「教育ノ大意」という二つの試験科目に着目し、試験問題の分析や試験委員の関わりなどについて検討された。この研究は、「文検」の大枠を明らかにし、その後の研究の枠組みを示したという意味で重要なものである。

しかし「文検」の研究はこれで終了した訳ではない。「文検」の試験科目は全部で 40 科目（時期によって異なる）程度存在し、数多くの教科は未開拓のままである。というのも寺﨑らによって扱われた「教育学」や「教育ノ大意」といった科目は、「文検」においては傍流ともいえるものだからである。そこで小田 義隆「戦前日本における『文検』歴史科試験問題の分析」（『日本教師教育学会年報』第９号、2000 年）、井上えり子「中等学校家事科教員検定試験研究（第１報）――『文検家事』の機能」（『日本家庭科教育学会誌』第 44 巻第３号、2001 年）らによって、学科目別の研究が進められつつある。さらに「文検」研究会でもこの分野の研究を進め、その成果は、『「文検」試験問題の研究――戦前中等教員に期待された専門・教職教養と学習』（学文社、2003 年）にまとめられた。ここでは、おもに「英語」「数学」「歴史」「公民」「家事及裁縫」などの試験問題の分析が行なわれている。ここにおいて、ようやく学科目別の本格的な研究がはじまったといえよう。しかし「国語」科に関しては、先にも述べたように、研究の端緒すら未だ開かれていない状況にある。この研究上の空白を埋めることが求められている。

## ２．研究の目的

### （1）戦前期における中等学校の国語教員に求められた資質と教養の解明

本研究の第一の目的は、「文検国語科」の試験問題がどのようなものであったか、試験の範囲や内容、難易度等について検討し、戦前期における中等学校の国語教員に求められた資質と教養の内実を具体的に明らかにすることである。文検の試験問題は、先にも述べたように、まとまった形とはいえないものの様々な形で残されており、当時の受験生がどのような試験を受けたのかを具体的に

知ることができる。これらの試験がどのような意図をもって作成・出題され、受験生がそれらの問題にどのような態度で挑んでいったのかを明らかにすることで、戦前期における中等学校の国語科教員に求められた資質と教養について、具体的な形で把握することが可能になると考える。言うまでもなく戦前の中等学校は、いわば「エリート」予備軍の進学が中心であり、そこで教える教員に対する社会的な評価も非常に高かった。彼らの資質・教養の内実を知ることは、戦前期の「エリート」教育の水準がいかなるものであったのかを理解する手掛かりとなろう。同時に、彼らの資質や教養と現代のそれとを比較することによって、現代の国語教員が戦前から何を引き継ぎまた何を引き継げていないかについて論じるための、重要な資料的な基盤を用意することができると考えている。

（2）「教員の学び」に関する事例研究

本研究のもう一つの目的として、試験勉強という限られたフィールドの中ではあるが、戦前期における教員、なかでも小学校教員の「学び」の実態とその背景について検討するための基礎的資料を発掘・提示することを挙げておきたい。これまで過去の教員や教育実践を研究対象とするとき、その中心は授業にあった。一方でその授業を支えた教員自身の学びについては、あまり注意が払われてこなかった。授業はその時間内だけで成立するものではなく、それ以前の様々な営みの集積としてある。教員は教える主体であると同時に、学ぶ主体である。教員の日々の教育実践は、それまでに行われた教員自身の学びに支えられている部分が大きい。「文検」を受験したのは、小学校教員の一部分に過ぎないが、そこに教員の学びの一形態があったことは否定できない。そこでの学びは、合格不合格に関わらず、受験生である教員の日々の教育実践にとって大きな意義を有していたはずである。本研究を進めることによって、当時の小学校教員の「学び」に対する意識や動機、それを支える社会的背景やネットワークの実態を明らかにし、教育実践研究をより多角的に行うための一助となるような資料的基盤の構築することができると考える。

## ３．研究の方法

（1）試験問題の発掘と整理

「文検」の試験問題に関する研究の難しさの一因として、その内容に関する公的な発表がほとんど行われていなかったことが挙げられる。ごく稀に、文部省年報などで発表されていたこともあったが、ほとんどの場合、公的な機関による発表は行われてこなかった。しかし一方で、当時出版された試験問題集や受験手引書、さらには受験雑誌に掲載された記事などにおいては、試験問題の全文が掲載されることが少なくなかった。無論、これらの資料に掲載されているのは、それぞれ出版された時期を起点とする限られた期間の問題のみであり、一つの資料がすべての年代の試験を網羅しているということはない。従って、いくつかの書物の情報を重ね合わせながら、試験が行われた期間全体の試験問題を収集しなければならない。このような作業を通して、まず実際に行われた試験問題を発掘し、その全貌を通覧できるような形で整理する必要がある。約 60 年に渡って実施された試験は、当然、時代によって内容や難易度等にも変化があったことが予想される。問題の収集と整理を進めながら、その歴史的変遷についても分析を進めていく。

（2）出題者の意図の解明

問題の分析を進める中で、出題者の意図を明らかにしていく作業も必要となる。先行研究によれば、文検の試験問題は、数名の試験委員によって作成されていたと考えられている。試験委員は、それぞれの領域における学問的権威と呼びうる人物たちであり、帝国大学や高等師範学校等の教員が務めることが一般的であった。試験委員の氏名は官報でも公開されており、彼らは試験委員として、教育雑誌等において試験問題や受験生の状況などについて論じることもあった。そこで『小学校』、『教育学術界』、『日本之小学教師』、『国語教育』といった、受験生たちが読んだと考えられる当時の代表的な教育雑誌や『文検世界』、『文検受験生』といった受験雑誌、更には受験のノウハウについて書かれた受験手引書などを精査することで、それぞれの時代における試験委員の出題意図の解明を目指す。さらに個々の試験委員の学問的な背景と試験問題の出題内容を突き合わせていくことで、当時のアカデミックな状況が出題にどの程度影響を与えたのかといった問題についても検討を進めていく。

（3）受験生の学習実態の解明

受験手引書や受験雑誌等には、試験委員から受験生へのアドバイスだけでなく、受験生自身による受験体験記や勉強法も数多く掲載されている。（1）において整理を行った試験問題の内容と、これらの受験体験記等を突き合わせることによって、受験生たちが、それぞれの問題にどのように取り組んできたか、また問題の難易度や問題ごとの軽重をどのように捉えていたかを確認することができるはずである。その他、受験生個人によって書かれた回想録等の資料を出来るだけ収集し、受験生の学習実態解明に努める。また先行研究等によって、他の学科目では、受験生同志による学習ネットワークのようなものが存在し、有志によるボランタリーな受験指導が行われていたことが明らかとなっている。「国語科」においても、同様のネットワークが存在する可能性が高い（国語科は、受験生が最も多かった学科目である）。先に

挙げた受験生らによる受験体験記等の資料を分析し、受験生同志がどのような情報交換や人的交流を行っていたのかを検討する。

## ４．研究成果

### （1）　試験制度及び問題の変遷

先にも述べたように、文検の試験問題は公的な形での発表がなく、収集には予想以上の時間がかかり、現在も、いくつか未確認の問題が残されている。しかし大部分の試験問題については収集が完了し、今後研究を進めていくための資料的な基盤を確立することができた。これが本研究の第一の成果である。またそれらの問題を分析することによって、試験問題の内容やその変遷について、以下のような事実が明らかとなった。

まず（漢文を別にすれば）受験生の最大の課題は一定の長さの古典作品を現代語訳する「解釈」問題にあり、特に指定書とされた 11 の書物をしっかりと読みこなすだけの能力が求められていた。これは中等教育だけを受けた者（例えば師範学校卒業者など）にとっては、やはりかなり高いハードルであり、しっかりとした「独学」が不可欠であったと推測される。次に受験生にとって難関とされたのが、古典作品や国文法および文学史等に関する知識を問う「設問」であった。問題を見る限り、必ずしも「常識」というには難し過ぎるのではないかという印象を与えるものも少なくないが、むしろこれらの問題を「常識」と見なせる程度の素養を「解釈」問題を中心とした学習によって身に付けておかなければならないと考えられていたようである。一方、受験生たちに比較的軽い扱いを受けていたのが「作文」であった。受験生の中には、「作文」に対する準備をほとんど行わずに受験に臨むものもあり、学習の比重が「解釈」とは大きく異なっていた。また「作文」については、出題内容が時代によって大きく変化をしていった様子が明らかとなった。即ち明治期には学校をテーマとした題が多く出題され、国語教育的な出題も見られたが、大正期に入ると随想的な文章を書かせるような題が中心となり、時事的な内容も出題されるようになった。時事的な出題は、昭和期になるとさらに頻度を増し、内容もより政治的なものとなっていったことを確認することができた。

難易度や出題の意図などについては、今後、試験委員の研究や受験体験記などの分析を進めることで、より明らかになってくるはずである。また出題傾向の変容についても、当時の中等学校をはじめとする「国語科」の教育内容の変遷と照らし合わせながら、考察を深めていく必要がある。

### （2）受験生たちの学びのネットワーク

本研究のもう一つの成果として、「文検国語科」の受験生たちによる学びのネットワークについて、これまで先行研究等ではほとんどしてきされてこなかった事実が見えてきたことである。具体的には、大正から昭和にかけて、名古屋と九州の２カ所で、それぞれ独立に「文検国語科」受験生を中心とした学習組織が立ち上げられ、それぞれ機関誌を発行する等、積極的な活動を行っていたことが今回明らかとなった。

一つ目の学習集団は、当時、愛知県師範学校の教員を務めていた岡田稔を中心とした名古屋国文学会である。彼らは 1924（大正 13）年から『国漢研究』という雑誌を発行し、その雑誌を通じて文検国語科の受験者に対する受験指導を行うようになった。この『国漢研究』は、1936（昭和 11）年まで続き、87 巻まで発行された。試験委員や学界の権威を講師として招集して夏期講習会を開催する等、積極的な活動を行っていたことが分かっている。またこの雑誌の特徴として、誌上模擬試験を行っていたことが挙げられる。雑誌内に問題を掲載し、解答を送ってきた者に対しては、雑誌の中等で講評を行って、学習の習熟度を判定した。もう一つの学習集団は、後に当時鹿児島第七高等学校で教員を務めていた新屋敷幸繁を中心とした、九州国文学会である。彼らもまた、1931（昭和 6）年から 5 年に渡って雑誌『日本文学』を発行し、文検国語科受験生への情報を発信し続けた。

少なくとも文検制度の研究および国語教育研究の分野において、これらの組織について言及しているものは、管見の限り見当たらない。調査によって、主催者である岡田・新屋敷の履歴に関する資料も収集が進んでおり、雑誌の内容と合わせて分析を進めている。これらの資料によって、大正から昭和にかけて、中等学校の「国語科」教員を目指した多くの独学者の学習実態とそのネットワークについて、新たな事実を提示できると考えている。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 小笠原　拓「『文検国語科』の研究（２）――筆記試験の構成と全体像」、『地域学論集』、査読無、第 10 巻第 3 号、2014 年 3 月、pp.47-74

## ６．研究組織

(1)研究代表者

小笠原　拓（OGASAWARA、Taku）
鳥取大学・地域学部・准教授
研究者番号：20372675

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし